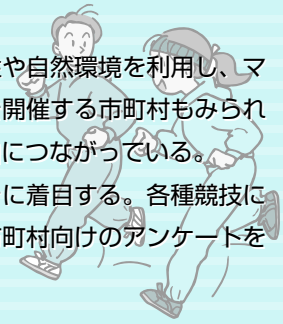
調 査

# アウトドアスポーツイベントによる地域活性化に向けて

近年、団塊世代や女性のアウトドア志向の高まりにみられるように、積極的にスポーツの機会を求める人々が増えている。それに伴い登山などアウトドアスポーツ用品の市場も、若い男性中心から、性別や世代を問わない市場へと変化、拡大している。

地方では、従来のスポーツ振興に加え、地域振興も目的として地理的特性や自然環境を利用し、マラソン大会やトレイルランニング、その他のアウトドアスポーツイベントを開催する市町村もみられるようになってきた。その結果、一部では来訪者の増加や、域内消費の増加につながっている。

そこで本号では、アウトドアスポーツのイベントによる地域活性化の動きに着目する。各種競技に関わる団体や事業者、イベント開催地自治体へのヒアリングと、茨城県内市町村向けのアンケートを通じて地域活性化に向けたヒントを探っていく。



## 第１章　アウトドアスポーツの現状

### １．本号における「アウトドアスポーツ」

「アウトドアスポーツ」は、屋外で行うスポーツを総称している。本号では、そのなかでもマラソンや自転車ロードレース、サーフィンなど主として個人、または少人数のチームで競われ、専用の施設を必要とせず、開催地の地理的特性を利用して開催される種目に着目する。

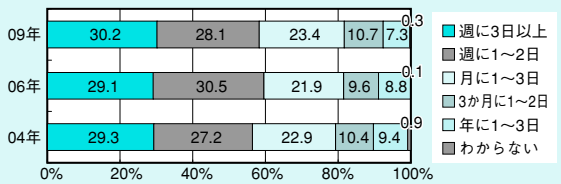
### ２．全国のアウトドアスポーツの状況

#### 20歳以上の約6割がスポーツを定期的に実施

まず、内閣府の「体力・スポーツに関する世論調査」を用いて、国民のスポーツに関する意識をみてみよう（図１）。

09年では、「週に３日以上」実施したという回答は30.2%、「週に１～２日」は28.1%となっており、定期的にスポーツを行っている人の割合は、概ね６割前後で推移している。

【図１：スポーツの実施日数（国）】

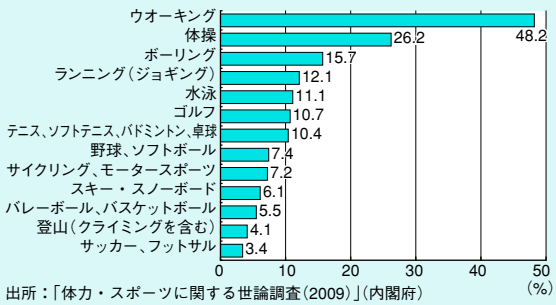



出所：「体力・スポーツに関する世論調査（2004,2006,2009）」（内閣府）

#### 最も多く実施されたのは「ウオーキング」

実施したスポーツの種目をみていこう。最も多くの人が実施したと回答したスポーツは「ウオーキング」（48.2%）で半数近くである（図２）。本号で

【図２：この１年間に行った運動・スポーツの種目（複数回答）】



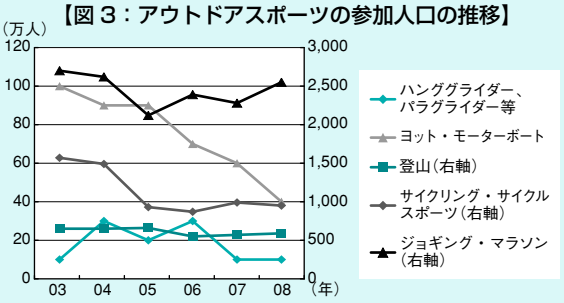

出所：「体力・スポーツに関する世論調査（2009）」（内閣府）

着目するアウトドアスポーツでは、「ランニング」が12.1%、「サイクリング、モータースポーツ」が7.2%となっている。

### アウトドアスポーツへの参加人口は増加

アウトドアスポーツへの参加人数を全国の統計で確認すると、「ジョギング・マラソン」が05年の2,120万人から08年には2,550万人と近年増加していることがわかる（図３）。

【図３：アウトドアスポーツの参加人口の推移】

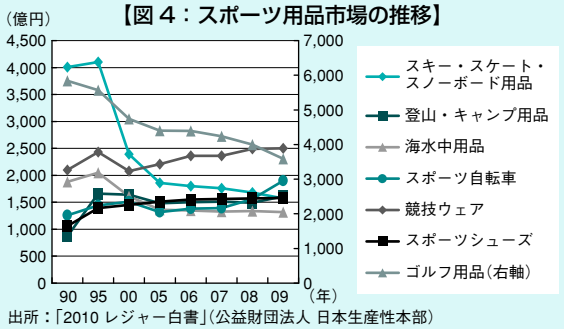



出所：「2010 レジャー白書」（公益財団法人 日本生産性本部）

### スポーツ用品市場の推移

スポーツ用品市場の推移をみると、「ゴルフ用品」や「スキー・スケート・スノーボード用品」の大幅な落ち込みもあり、全体的に減少している（図４）。一方、「スポーツ自転車」は90年の1,260億円から09年には1,900億円に、「競技ウェア」は90年の2,100億円から09年には2,500億円に増加するなど、競技によっては需要が高まっている。

【図４：スポーツ用品市場の推移】




出所：「2010 レジャー白書」（公益財団法人 日本生産性本部）

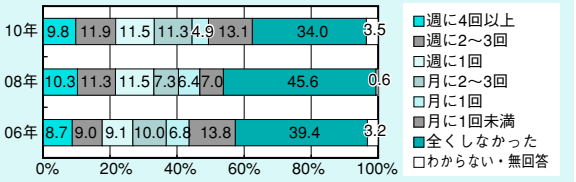
## ３．茨城県民のアウトドアスポーツへの関わり

### スポーツの実施割合は増加

次に、茨城県民のアウトドアスポーツへの関わりを探ってみよう（図５）。

茨城県が行った県政世論調査では、「月に２～３回」から「週に４回以上」までの比較的高い頻度でスポーツを実施する人が、06年の合計36.8%から10年の合計44.5%へ増加しており、スポーツを定期的に実施する人の割合が高まっていることがわかる。

【図5：スポーツの実施状況（茨城県）】

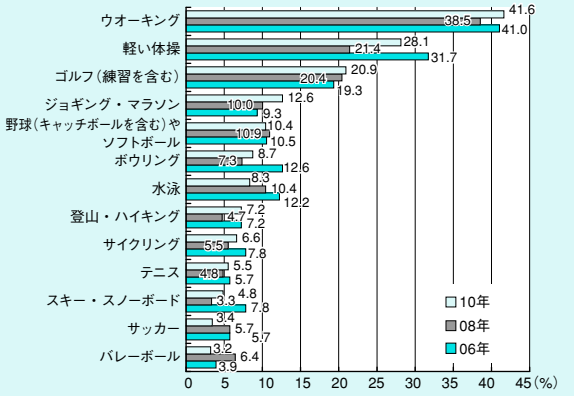



出所：「県政世論調査（2006,2008,2010）」（茨城県）

### 実施スポーツは「ウオーキング」が多い

実施したスポーツは、全国と同様に「ウオーキング」が最も多く、10年では41.6%となっている（図６）。また、アウトドアスポーツでは、「ジョギング・マラソン」は12.6%となっている。さらに、その割合は年々増加しており、伸長しつつある種目であることがわかる。

【図６：実施したスポーツ（複数回答）】




出所：「県政世論調査（2006,2008,2010）」（茨城県）

## ４．茨城県内のアウトドアスポーツイベント

常陽アークでは茨城県内の全市町村を対象に、アウトドアスポーツイベントに関するアンケートを実施した。その結果、表１の通り県内28市町村で58の大会が開催されている状況を確認できた（第２章で詳述）。

## 表1：県内におけるアウトドアスポーツの大会開催状況

| 市町村名 | 競技名 | イベント名 | 開催月 | 主催者 | 出場者数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 日立市 | マラソン | さくらロードレース | 4月 | 日立さくらロードレース実行委員会、日立市他 | 約18,000人 |
| | サーフィン | 日立カップ | 10月 | 茨城サーフユニオン | 約200人 |
| 土浦市<br>かすみがうら市 | マラソン※ | かすみがうらマラソン | 4月 | 土浦市ほか | 約21,000人 |
| 古河市 | その他 | Eボートレース渡良瀬大会 | 8月 | Eボートレース渡良瀬大会実行委員会 | 約410人 |
| | マラソン | I LOVE　古河マラソン in　谷中湖 | 11月 | 古河青年会議所 | 約1,200人 |
| 石岡市 | マラソン | 石岡つくばねマラソン | 2月 | 石岡市・石岡市教育委員会・石岡市体育協会 | 約2,000人 |
| 結城市 | マラソン | 結城シルクカップロードレース大会 | 2月 | 結城シルクカップロードレース大会実行委員会 | 2,500人 |
| 龍ケ崎市 | ウオーク | 牛久沼ウオーキング | 3月 | 龍ケ崎市 | 120人 |
| 下妻市 | その他 | 鬼怒川流域交流Eボート大会 | 8月 | 下妻市・鬼怒川広域交流Eボート大会実行委員会他 | 約500人 |
| | マラソン | 砂沼マラソン大会 | 11月 | 下妻市・下妻市市教育委員会 | 約1,400人 |
| 常陸太田市 | 自転車オフロードレース | うっかり八兵衛カップ　春休み編 | 3月 | 常陸太田市体育協会マウンテンバイク部 | 約300人 |
| | 自転車オフロードレース | うっかり八兵衛カップ　秋の収穫祭 | 9月 | 常陸太田市体育協会マウンテンバイク部 | 約300人 |
| | マラソン | 西金砂登山マラソン大会 | 11月 | 常陸太田市、西金砂登山マラソン大会実行委員会他 | 約900人 |
| 高萩市 | ウオーク | 小山ダム歩く会 | 10月 | 高萩市 | 約360人 |
| | マラソン | 小山ダムマラソン大会 | 10月 | 体育協会 | 約300人 |
| | 駅伝 | たかはぎ駅伝競走大会 | 12月 | 高萩市 | 約500人 |
| 笠間市 | 自転車ロードレース | センチュリーラン笠間 | 9月 | ㈶日本サイクリング協会 | 約600人 |
| | マラソン | かさま陶芸の里マラソン大会 | 12月 | かさま陶芸の里マラソン大会実行委員会 | 約4,200人 |
| 牛久市 | マラソン | 牛久シティマラソン | 1月 | 牛久市 | 約3,800人 |
| つくば市 | マラソン | つくば健康マラソン大会 | 1月 | つくば市 | 約2,000人 |
| | ウオーク | つくば学園ウオークラリー大会 | 6月 | つくば市 | 約500人 |
| | 自転車ロードレース | ツール・ド・つくば | 6月 | 社団法人つくば青年会議所 | 約500人 |
| | マラソン※ | つくばマラソン | 11月 | つくば市 | 約15,000人 |
| ひたちなか市 | マラソン※ | 勝田全国マラソン大会 | 1月 | ひたちなか市,他 | 約16,000人 |
| | その他 | ビーチふれあいフェスティバル | 9月 | 阿字ヶ浦・磯崎里浜づくり実行委員会 | - |
| | 自転車ロードレース | ツール・ド・ひたちなか | 11月 | アジアスポーツコミュニケーションズ | 約1,500人 |
| | その他 | 阿字LOVEビーチ | 11月 | 阿字ヶ浦・磯崎里浜づくり実行委員会 | - |
| | 駅伝 | 三浜駅伝競走大会 | 12月 | ひたちなか市,他 | 1,733人 |
| 鹿嶋市 | 駅伝 | 鹿嶋市駅伝大会 | 1月 | 鹿嶋市　鹿嶋市体育協会 | 1,000人 |
| 潮来市 | トライアスロン | 潮来トライアスロン全国大会 | 5月 | 潮来ﾄﾗｲｱｽﾛﾝ全国大会実行委員会 | 約300人 |
| | その他 | 水郷潮来レガッタ | 6月 | 潮来市 | 約600人 |
| 守谷市 | マラソン | 守谷ハーフマラソン | 2月 | 守谷市体育協会 | 約6,000人 |
| 常陸大宮市 | 駅伝 | 常陸大宮市駅伝大会 | 1月 | 常陸大宮市他 | 約1,700人 |
| 筑西市 | マラソン | ちくせいマラソン大会 | 12月 | ちくせいマラソン大会実行委員会 | 約2,900人 |
| 坂東市 | マラソン | 坂東市いわい将門ハーフマラソン大会 | 11月 | 坂東市 | 約6,500人 |
| 桜川市 | マラソン | 桜川市さくらマラソン大会 | 3月 | 桜川市 | 約1,400人 |
| | 自転車オフロードレース | MFJ全日本トライアル選手権シリーズ第1戦関東大会 | 3月 | 関東モーターサイクルスポーツ協会 | 約120人 |
| | 自転車ロードレース | ツール・ド・さくらがわ&ポタリングさくらがわ | 5月 | ツール・ド・さくらがわ実行委員会 | 約600人 |
| | ウオーク | ふれあいウォーク桜川 | 10月 | 桜川市 | 約150人 |
| 神栖市 | トライアスロン | 神栖市波崎トライアスロン大会 | 9月 | 神栖市 | 約700人 |
| 鉾田市 | マラソン | 2010ほこたマラソン | 1月 | 鉾田市 | 約1,700人 |
| | サーフィン | ロングボード第4戦茨城鉾田プロ | 7月 | JPSA | - |
| | サーフィン | ショートボード第5戦ムラサキプロ鉾田 | 10月 | JPSA | - |
| 茨城町 | 駅伝 | 茨城町体力づくり駅伝大会 | 12月 | 茨城町 | 約750人 |
| 大洗町 | マラソン | 大洗町マラソンサンビーチ・マイルレース | 2月 | 大洗町 | 約1,100人 |
| | その他 | ビーチバレーin大洗 | 7月 | 大洗町、茨城県バレーボール協会 | 約400人 |
| | その他 | 全日本ビーチレスリング選手権大会 | 7月 | 財）日本レスリング協会 | 約200人 |
| | ヨット | 大洗観光協会長杯ヨットレース | 7月 | 大洗マリーナ利用者協議会 | 約50人 |
| | その他 | 茨城ビルフィッシュトーナメント | 8月 | いばらきビルフィッシュトーナメントネットワーク | 約300人 |
| | サーフィン | OARAI CUP　サーフィン&ボディボード | 9月 | 大洗のまつり実行委員会、大洗海の大学 | 約200人 |
| | サーフィン | ISU茨城サーフィンクラシック | 9月 | 茨城サーフユニオン | 約150人 |
| 城里町 | マラソン | 第6回城里町マラソン大会 | 12月 | 城里町教育委員会 | 約900人 |
| 東海村 | マラソン | 東海村新春マラソン大会 | 1月 | 東海村・東海村教育委員会 | 約2,000人 |
| | サーフィン | マハナガールズカップ | 8月 | マハナガールズカップ実行委員会 | 約300人 |
| 大子町 | マラソン | 奥久慈湯の里大子マラソン大会 | 3月 | 実行委員会 | 2,000人 |
| | トレイルランニング | 奥久慈トレイル50K | 4月 | OSJ | 500人 |
| 阿見町 | ヨット | ジュニアヨット教室 | 6月 | 阿見町 | 約60人 |
| | マラソン | 阿見町マラソン大会 | 12月 | 阿見町 | 約730人 |

※フルマラソンを含む大会

### 茨城県は大型マラソン大会が多い

マラソン大会への参加人数を比較すると、国内上位10大会のうち４大会が茨城県内で開催されている（表２）。

これは、ランナーの多い都心に比較的近く選手がアクセスしやすいこと、地理的に平坦な環境で走りやすいコースを設定できる点が影響しているとみられる。

表2：日本国内におけるマラソン大会の参加状況

| 順位 | 参加人数 | 大会名 | 県名 | 開催日 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 35,028 | 東京マラソン | 東京 | 2010/2/28 |
| 2 | 23,402 | NAHAマラソン | 沖縄 | 2010/12/5 |
| 3 | 22,891 | 湘南国際マラソン | 神奈川 | 2009/11/8 |
| 4 | 21,304 | かすみがうらマラソン | 茨城 | 2010/4/18 |
| 5 | 20,041 | いぶすき菜の花マラソン | 鹿児島 | 2010/1/10 |
| 6 | 18,454 | 日立さくらロードレース | 茨城 | 2010/4/4 |
| 7 | 16,772 | 青梅マラソン | 東京 | 2010/2/21 |
| 8 | 16,175 | 勝田全国マラソン | 茨城 | 2010/1/31 |
| 9 | 15,664 | つくばマラソン | 茨城 | 2010/11/28 |
| 10 | 15,208 | 東京・荒川市民マラソン | 東京 | 2010/3/21 |

出所：大会HPをもとに常陽アーク調べ

ここまでのデータから、茨城県も全国と同様に、多くの人が定期的にスポーツを行っている状況を確認できた。また、イベントの開催状況でも、大規模なマラソン大会をはじめ、数多くの大会が開催されている、アウトドアスポーツ県であることがわかった。

# 第2章　茨城県内のアウトドアスポーツイベント活用状況
## ～市町村向けアンケート調査結果より

茨城県内におけるアウトドアスポーツイベントの開催及びその活用状況や効果、課題などについて、市町村へのアンケート調査をもとに整理してみよう。

### 1．アンケート調査の概要

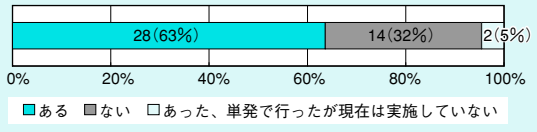
●調査期間：2010年11月11日～12月17日
●調査方法：電子メールまたはFAXにて回収
●調査対象：茨城県内44市町村
●有効回答数：44市町村（有効回答率：100％）

### 2．アンケート調査の結果

#### 6割超の市町村でイベントを実施

自市町村内で継続して開催されているアウトドアスポーツイベントの有無については、「ある」が28市町村（63%）で、「ない」の14市町村（32%）、「あった、単発で行ったが現在は実施していない」の2市町村（5％）を大きく上回る（図7）。

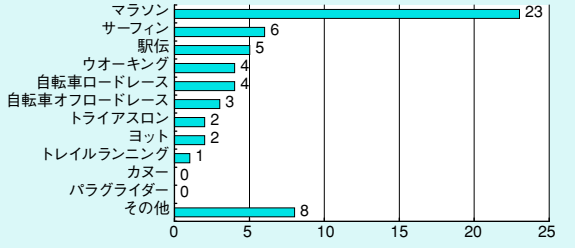
【図7：アウトドアスポーツイベントの有無(n=44)】




#### 競技種別は「マラソン」に集中

県内市町村で実施されている58大会の種目をみると、「マラソン」が23大会と最も多く、全体会の4割を占めている（図8）。次いで「サーフィン」が6大会、「駅伝」が5大会となっている。

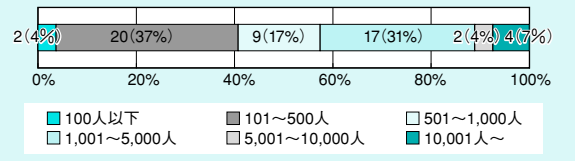
【図8：実施しているスポーツイベント(n=58)】




#### 1,000人以下のイベントが過半数

出場者数については、「101～500人」が20大会（37%）と最も多く、イベントの半数以上が1,000人以下の規模で開催されている（図9）。なお、「10,001人～」という回答（4大会）は前述の通り全てマラソン大会である。

【図9：出場者数(n=54)】

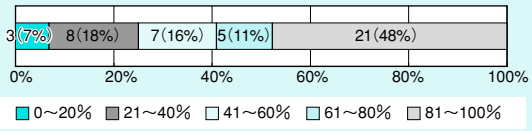



#### 県外からの参加は限定的

イベント参加者における県民の占める割合についてみてみると、44大会のうち「81～100%」が21

大会（48％）で最も多い（図10）。次いで「21～40％」が８大会（18％）、「41～60％」が７大会（16％）となっている。なお、県外からの参加割合が高いイベントは、マラソン大会とサーフィン等の水辺のスポーツであり、逆にこうした種目は県外から人を呼び寄せているといえる。

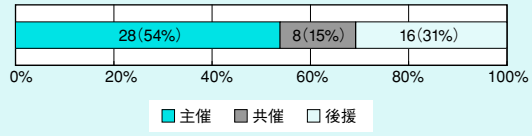
【図 10：県民の参加割合(n=44)】




### 市町村主催の大会が半数以上

市町村の役割は、半数を超える28大会（54％）で「主催」、「共催」は８大会（15％）、後援が16大会（31％）となっている（図11）。大部分の大会で、市町村の主体的な関わりがみられる。

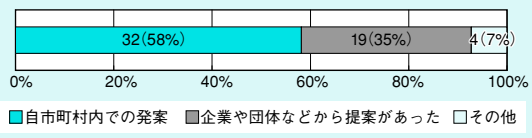
【図 11：市町村の役割(n=52)】




### 「自市町村での発案」が過半数

開催のきっかけについては、「自市町村内での発案」が32大会（58％）、「企業や団体からの提案」が19大会（35％）、「その他」が４大会（７％）となっている（図12）。種目別にみると、自市町村の発案はマラソンが多く、企業や団体からの提案はその他のアウトドアスポーツが多い。

【図 12：実施のきっかけ(n=55)】




### 開催の目的と効果の多くは「住民の健康意識」の向上

開催の具体的な目的として最も多いのが、「住民の健康意識の啓発」で31大会となっている（図13）。次いで、「まちの知名度向上」が25大会、「地域経済への波及」が24大会という結果であった。

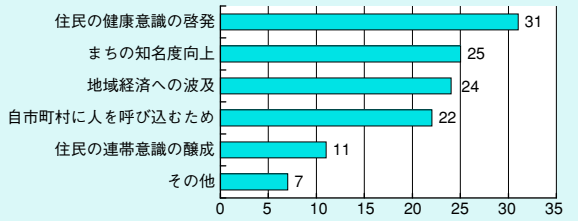
アウトドアスポーツイベントの効果は、「住民の健康意識が高まった」が32大会と最も多い（図14）。次に「まちの知名度が向上した」が26大会、「自市町村内に訪れる人が増加した」が21大会となっている。

地域活性化の観点から目的と効果を比較すると、イベント開催の目的の問いに対し「自市町村に人を呼び込む」と回答し、効果の項目で「自市町村に訪れる人が増加した」と回答したイベントは22大会のうち17大会あり、８割近いイベントで目的が達成されている。

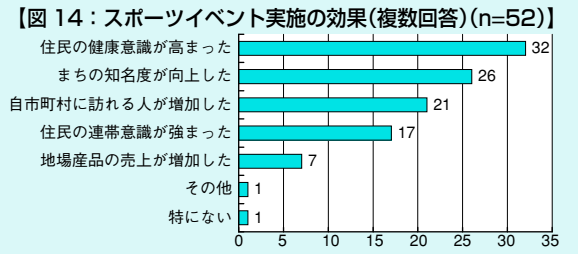
一方、「地域経済への波及」が目的と回答した24大会のうち、「地場産品の売上が増加した」と回答しているのは５大会に留まっている。

「まちの地名度向上」については、25大会が目的としている中、21大会で「まちの知名度が向上した」という効果がみられた。

【図 13：スポーツイベントを実施する目的(複数回答)(n=52)】



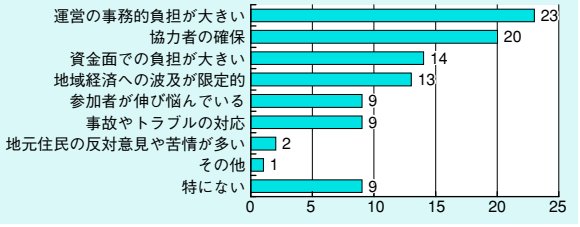

【図 14：スポーツイベント実施の効果(複数回答)(n=52)】




### 課題は「運営の事務的負担」

イベントの課題としては、「運営の事務的負担が

【図 15：スポーツイベントを実施するうえでの課題(複数回答)(n=52)】



大きい」が23大会と最も多い（図15）。次いで、「協力者の確保」が20大会、「資金面での負担が大きい」が14 大会、「地域経済への波及が限定的」が13大会となっている。

### 3．アンケート調査のまとめ

**6割超の市町村でイベントを実施**

茨城県内では、6 割を超える市町村が何らかのアウトドアスポーツイベントを実施している。種目別でみるとマラソンが圧倒的に多く、駅伝を含めると半数以上が長距離走のイベントとなっている。こうした競技は気温が低い時期に行われる傾向があるため、11月から 1 月にかけての開催が多くなっている。

県内では、スポーツイベント開催により住民の健康意識向上やまちの知名度向上など様々な効果につながっているものの、地域経済への波及については限定的であるといえる。

# 第3章　アウトドアスポーツイベントを実施する市町村や企業の取り組み

本章では、アウトドアスポーツイベントを実施する市町村や企業、団体へのヒアリングから、アウトドアスポーツイベントを実施する目的や効果、実施にあたっての留意点を探っていく。

まず、県内で最も多くのイベントが開催されているマラソンからみていこう。

## 1．マラソン

茨城県では、全国でみても大規模な大会が複数開催されている。なかでも県内最大規模のスポーツイベントであるかすみがうらマラソンは、新たな企画を提供しつづけることで、東京マラソンによるマラソンブームが始まる前から着々と参加者を増やしてきた。このイベントに対する考えかたや方針等について、みてみよう。

### ランナーズヴィレッジでまちに人を呼び込む

かすみがうらマラソン大会事務局

**土浦市スポーツ振興課　主幹　永木　聡氏**

**「環境と福祉」のマラソン大会**

かすみがうらマラソンは今年 4 月で21回目の開催を迎える県内最大のマラソン大会です。現在、全国では 2 千以上のマラソン大会が開催されています。その中で、かすみがうらマラソンは最近のマラソンブーム以前から着実に参加者を増やしています。

この大会では「環境と福祉」をメインテーマに掲げています。環境の面では、参加費の一部を霞ヶ浦の水質浄化に役立てているほか、沿道の応援を使い捨ての手旗ではなく応援タオルにするなど、ごみの削減に努めています。福祉の面では、国際盲人大会を同時開催しており、参加費の一部を盲導犬育成助成金として寄贈しています。

大会運営はイベント会社に委託せず、職員が手づくりで行っています。また、毎年4,000名ものボランティアが大会をサポートしています。

### 盲人マラソンを同時開催

同時開催の盲人マラソンは今年で17回目を迎えます。第２回からは国際盲人マラソン大会となり、世界選手権が開催されるなど20カ国以上から盲人トップランナーが集まります。

この大会は、「体験する福祉」を意味するノーマライゼーションの実践をサブテーマに掲げ、盲人ランナーも健常者と一緒に同じコースを走ります。障害者と健常者の隔たりをなくし、純粋にマラソンを楽しむ機会を提供しています。

### 地域経済への波及を目指すランナーズヴィレッジ

ランナーは、各地の大会の口コミをチェックしています。そのため、前年と同じ大会運営では、参加者が減少するという危機感を常に念頭に置き、毎回、新たな企画を提案しています。

例年９月に実行委員会を立ち上げ、その中で企画検討部会を設置して新企画の協議をします。第20回大会より、商工観光課と連携して駅の西口にあるモール505にランナーズヴィレッジを設置しました。これは、レース後のひと時を家族や友人と共に疲れを癒しながら楽しむ場で、カレー鍋の炊き出しやマグロの解体ショーなどのイベントを実施しています。

またこの大会より、スタート地点を陸上競技場外周道路から土浦駅東口大通りに変更しました。スタート時の混雑解消につながり、ランナーの好評を博しました。RUNNETというマラソン大会を評価するインターネットのサイトでも、高得点を得ています。

これまでは大会が終わると、ランナーはすぐに土浦から帰ってしまいました。これらの取り組みにより、まちなかを訪れ滞留するランナーが増えてくれればと期待しています。

### スポーツツーリズムの可能性

現在、マラソンを核とした観光旅行を提案しています。例えばマラソン大会を目的に３泊４日の旅行を企画する。大会に参加する以外の日は大洗などの観光地を周遊してもらう。全国から２万５千人が集まるので、スポーツツーリズムとして成功の可能性は大きいはずと考えています。

多くの人でにぎわうランナーズヴィレッジ

地方で開催されるマラソン大会は、ボランティアやスタッフの高齢化など運営面で様々な課題を抱えている。こうした課題に対して独自のボランティアシステムの活用を提案するアールビーズスポーツ財団の取り組みをみてみよう。

## スポーツイベントを総合的にサポート

一般財団法人アールビーズスポーツ財団（東京都渋谷区）

**事務局長　柴田　光氏**

### スポーツ振興を目的に設立

アールビーズスポーツ財団は、ランニングやバイク、スイムの月刊誌の出版や、それらスポーツのイベントの開催、大会サポートを行う㈱アールビーズの関連財団として昨年２月に設立されました。これまで同社が関わってきた市民参加型スポーツイベントの開催事業を引き継いでいます。

### 斬新なイベントを開催

当財団は、新しいコンセプトのランニングイベントの開催に力を入れています。例えば、昨年10月にはオクトーバー・スポーツマラソンやフライデーナイト・リレーマラソンを開催しました。オクトーバー・スポーツマラソンは、１カ月間で走った距離（ラン、自転車）をネット上で競いあうイベントです。フライデーナイト・スポーツマラソンは国立競技場を会場として金曜日の夜から土曜日の朝まで、チームがたすきをつないでリレーする初のオールナイトのランニングイベントです。夜７時から12時間のリレーマラソンを開催し、多くの方に参加していただきました。

また、本年１月にはブレックファーストのフードサービスやペースメーカーの配置など、ランナーの走りやすさを追求した荒川30Ｋという大会を開催しました。

その他、アールビーズから引き継いだイベントとして、EKIDENカーニバル(東京、神奈川、大阪)があります。３大会で約5,200チーム（28,000人）が集まる日本最大の駅伝大会です。

### 大会レポと大会百撰

07年の東京マラソンの開催を機に、市民ランナーは大幅に増加しました。彼らは各地のマラソン大会に参加していることから、目が肥えてきています。

アールビーズグループが提供しているRUNNETというランニングのインターネットサイトの「大会レポ」コーナーでは、参加したランナーが大会について様々な意見を書き込み、参加者の視点から大会を採点しています。その結果、人気上位の100大会は「大会百撰」として発表しています。このネットの評価が、次年度の参加者の増減に大きく影響を与えています。

### 独自のボランティアシステム

マラソン大会のような長距離のイベントには、多くのスタッフがボランティアとして参加する必要があります。しかし地方では、これまで参加して来たボランティアの高齢化やスタッフの不足といった課題があるようです。

当財団は、前述のRUNNET会員に登録している約80万人のランナーを対象にボランティアを依頼するシステムを構築しています。大会の開催地域や必要人数等に応じて属性を絞り、メールでボランティアへの参加を呼びかけることができます。その他にも研修を受け経験を積んだ有償スタッフ（約100名）を、ボランティアのリーダーとして派遣しています。

これらのボランティアを、給水など人手の必要な分野に活用することで、行政は運営の負担を軽減することができるようになっています。

### スポーツイベントの普及を支える

当財団には、長年に渡りランニングの普及・発展のため計測、計時、大会運営などで数多くの事業を実施してきたグループ会社のネットワークやノウハウがあります。これらを活用することで、今後も市民参加型のスポーツイベントの開催やスポーツボランティアの育成・派遣を実施し、より多くの人の健康づくりに関わっていく方針です。

## 2. トレイルランニング

常陸太田市の竜神大吊り橋をスタートし、大子町の袋田の滝に至る山道を走るスポーツイベント「奥久慈トレイル50K」は、全国でも屈指の難コースのトレイルランニング大会として注目されている。その開催には、水戸市にあるスポーツ用品店ナムチェバザールが大きく関わっていた。その代表に、開催の経緯や運営の課題などについて伺った。

### トレイルランニングを県内に普及

株式会社ナムチェバザール（水戸市）

**代表取締役　和田　幾久郎氏**

#### スポーツアクティビティと用品販売をセットで

当社は94年に水戸市で創業したアウトドア用品店です。単なる商品販売ではなく、アウトドアアクティビティイベントによる需要喚起を用品販売につなげていく、というコンセプトを創業時より貫いています。

#### アクティビティの提案

最初に企画したアクティビティは、トレッキングです。開業当初、著名な登山家である小西政継（故人・元当社取締役）のトレッキングツアーを毎月開催し、登山愛好家にとっては貴重な体験となったようです。

現在は、独自企画のトレッキングツアーを毎月開催し、茨城県内からコンスタントに参加者を集めています。最近は登山に興味を持つ女性が増えており、ツアーにも若い女性が多くみられるようになりました。

#### 奥久慈トレイルレースの開催

最近は、マラソンがブームです。それに伴い、ランナーの心肺機能の強化トレーニングとして、森林や山地などをコースとし、走破するタイムを競うトレイルランニングというスポーツが注目されています。

トレイルランニングは欧米が発祥で、多くの人に親しまれている人気のスポーツです。自然を観察したりしながら走るため、１日中飽きずに運動することができます。

茨城県北の地域活性化を図るグリーンふるさと振興機構の会議に出席した際、私はトレイルランニング大会の開催を提案しました。県北地域の地形は山のふもとがなだらかで、そのなかに集落が広がっていることから、トレイルコースとして適している点を説明し、会議で賛同を得ました。

開催に向けて、まず行政の協力を仰ぎました。コースとなる大子町の町長はすぐに承諾してくれました。次にトレイルランニングの運営を得意とする㈲パワースポーツの代表に現地をみてもらいました。すると、ここは優れたコースになるということで、即決で開催が決まりました。

コースの設計の面では、１回目から本格的なレースを開催しようということになり、当初予定していた30キロから50キロに延長しました。そのため、隣接する常陸太田市にも協力をお願いしました。

こうして開催された第１回奥久慈トレイルレースは、大変好評でした。世界トップクラスのランナーも出場し、その完走時間が他のレースに比べて長いことから、難易度の高さも証明されました。そのため、世界的なレースである「ウルトラトレイル・デュ・モンブラン」の参加資格を得るポイント対象のレースに認定されました。

#### 地域住民の関わりに期待

しかし、課題もみえてきました。それは、地元の人たちに、この大会を活用してまちづくりにつなげようという意識が薄いことです。せっかく他の地

域から人が集まるので、単に大会を開催するのではなく、大会を利用して地元の魅力をアピールすることに注力すべきだと思います。

幸い、第２回の大会では、私設のエイドステーションでランナーに水や食品を提供する動きがみられるなど、少しずつ地元の人の意識も変わっているように感じられました。こうしたもてなしに、参加した選手からも感激したとの声が寄せられています。地域住民たちの今後の動きに期待しています。

### スポーツでまちを元気にするには

このように住民を巻き込んだ取り組みを進める自治体は、県内にあまりないようです。アウトドアでのスポーツイベントは毎年開催が可能で、施設の維持といった負担もかかりません。それぞれのまちの持つ自然を活用できれば、大きな集客が見込めるはずです。

スポーツイベントは、関わる人の心の垣根を取り払う効果があります。こうしたスポーツの魅力を認識して、もっと活用すべきだと考えます。

「奥久慈トレイル50K」の開催地でもあり、ハイキングなど山でのスポーツの普及を通じて地域活性化を目指している大子町をみてみよう。

## 山を活かした奥久慈トレイル50K

**大子町企画観光課　課長補佐　深谷　雄一氏**
**主任　鈴木　大介氏**

### ハイキングの盛んな大子町

大子町は袋田の滝や八溝山、久慈川と自然に富んだ町です。この自然を活かしたハイキングやトレイルランニングが近年盛んになっています。

町としても、ハイキングコースの整備に取り組んでいます。中でも、男体山を麓から登山する「健脚コース」の人気は高く、多くの人が訪れます。この山は標高654メートルと低いものの、頂上からは周囲を360度見渡すことができるすばらしい眺望が開けています。

この山に惹かれ、年に200日以上登る方に奥久慈山岳アドバイザーをお願いし、登山道の整備やコース説明、マップの配布などを通じて大子の観光をPRしていただいています。

### 繰り返し訪れてもらうための環境整備

最近では登山ブームということもあり、高齢者から若い女性まで、様々な人がハイキング目的で大子町を訪れています。そのなかで特に女性への配慮から、男体山の麓に水洗トイレを設置しました。また、昔の街道（山道）を調査して、再び利用できるように整備したり、案内を標示したりすることで、何度も訪れていただけるようなコース整備を進めています。

今春にはハイキングに訪れた人を対象にアンケート調査を実施し、どこから来ているか、宿泊するのかなどの点について分析したいと考えています。

### ハイキングマップの発行計画

町内には、ハイキング好きが高じ、手づくりでハイキングマップを作成して、店などで配っていただいている方がいます。このマップが非常に良くできており、現在更新しているマップの参考にさせてもらっています。

更に、従来町で発行していたマップは１枚で町内全域のコース案内をしていましたが、新しいマップでは地区別に３分割して３種類のマップを作成することで、より分かりやすくご案内できるよう進めています。

### トレイルランニングの開催

09年４月より、広域連携で誘致したトレイルランニング大会が開催されています。

この大会は、大子町と常陸太田市の男体山系ハイキングコースをレースコースとして開催してお

り、グリーンふるさと振興機構、大子町、常陸太田市の３団体が支援しております。また、主催する㈲パワースポーツのトレイルレースシリーズにおける年間ポイントランキング対象となる、全国レベルのレースです。

### 町民の関わり

受付会場の袋田の滝周辺では「前夜祭」や「グリーンふるさと味覚フェア」を開催し、奥久慈しゃもや湯葉、鮎の塩焼き、常陸秋そば等の試食、販売を行い、特産品のPRを行いました。

またレースでは、ボランティアによるエイドステーションが参加者から大変好評で、これが奥久慈トレイルレースの魅力ともなりました。

### トレイルランニングの開催効果

約57キロにも及ぶコースで係員の配置も多くなり、費用対効果は薄いのが実情です。しかし、参加者に奥久慈の魅力が伝わり、その良さを周囲に広めてもらえれば開催する意義は十分にあるでしょう。

一例として、町内でここ数年の間にハイキングコースの近くなどに何軒か蕎麦屋が開店しました。トレイルランニングやハイキングの目的で町を訪れる人が増加したことも要因のひとつであり、地域に賑わいが生まれているようです。

### 自然の魅力を外部へ発信

今後もトレイルランニングやハイキングを通じて、大子町の魅力を外部に発信していきます。特に、奥久慈トレイルレースは全国屈指の難易度であることから話題となり、全国各地から参加いただいております。レースの参加者にとって完走した証は重要ですので、今後は完走賞としてのTシャツをつくるなど魅力ある内容充実も重要であると考えています。

トレイルランニングもハイキングも、通るコースは同じ山道です。プロのトレイルランナーから高齢者まで、様々な人に大子の自然の魅力を知ってもらえればと思います。

特産品を求め列を作る選手たち

群馬県神流町は、トレイルランニングのイベント開催を地域活性化に結びつけ、全国から注目される町となった。取り組みのきっかけや内容、効果などについて話を伺った。

## 神流マウンテンラン＆ウオークでまちに活気を呼び込む

神流町産業振興課（群馬県神流町）

**課長　岩崎　和義氏**

### 鏑木氏の提案で開催を検討

神流町は埼玉県に隣接する人口約２千５百人の小さな町です。人口減少に歯止めがかからず、高齢化率は50％を超えています。

こうした状況を危惧し、地域振興の手立てを探る中、群馬県の藤岡行政県税事務所及び群馬県庁の鏑木毅さん（現在はプロのトレイルランナー）から、トレイルランニングという競技開催の提案を受けました。

当初、どの町民もこの競技を知らず、都会から山の中を走りに人が集まるのかという疑問を感じていました。しかし鏑木さんから話を聞くうちに、折角だからやってみようということになりました。

### 開催に向けた苦労

イベントの開催までは、苦労の連続でした。まず、

コースの設計に苦労しました。山道は廃れており、職員やボランティアが藪を切り開きました。合わせて、周辺の草刈や測量を実施してコースを整備しました。

また、初回（09年11月）は狩猟の解禁日とレースが重なるという問題がレースの前に発覚しました。この問題も猟友会や自衛隊、地元警察の協力などにより無事にクリアすることができました。

### 手づくりの大会運営

この大会は、運営に業者を入れていない点が特徴です。タイムの計測などもボランティアに依頼しており、町の人口の15%にあたる380人が参加してくれました。また、ゴールゲートも住民の手づくりです。この地域の祭りの慣わしに従い、杉の葉でゴールゲートを覆いました。

定員は700名と小規模です。経済的な面で考えればより多くの人を招くべきですが、おもてなしを充実させたアットホームな大会にしたいという方針からこの規模に留めています。

こうした運営により、選手に癒しの空間を提供するだけでなく、選手とともに町民も元気を得る大会が開催できているのだと思います。

### 山村体験とウエルカムパーティー

選手とその家族に大会の前日から楽しんでもらう仕掛けとして、山村体験とウエルカムパーティーを用意しました。

山村体験は、①鍾乳洞探検とキノコ収穫、②豆腐作り体験、③大豆の収穫、④化石発掘体験、⑤そば打ち体験、といった神流ならではの山村体験メニューを80名の定員で用意しました。

また、ウエルカムパーティーでは、郷土料理30品を食べ放題で提供しています。加えて、地元のお酒も飲み放題としました。ボランティアが竹でコップや徳利をつくり、田舎の雰囲気を出しました。都会で食べられない料理ということもあり、参加者から好評でした。

### 民泊の実施

700名の選手やその家族がまちを訪れると、旅館だけでは前泊の対応が出来ません。そのため、ボランティアの家に選手を泊めてもらうことで受け入れ態勢を拡充させました。無償で風呂と寝床を提供していただくことにした結果、20数軒に100人以上の選手が泊まることが出来ました。

こうした交流がきっかけとなり、大会後も神流町に訪れる人が増えています。

### 経済効果を取り込む仕組みづくり

経済的な効果を取り込む工夫として、地域振興券の発行があります。これは、参加費（6,000円～9,000円）から1,000円分を地域限定チケットとして還元するもので、有効期限は大会開催中に設定してあります。そのため、参加選手が当地で土産や食品を購入することにつながっています。

また、大会開催に関する物品は基本的に町内から調達する仕組みとしたので、大会開催予算1,000万円の約８割が地元に還流しました。

その他、大会プロデューサーの鏑木さんによる試走会が開催される等、レース時以外にも神流町を訪れるランナーやハイカーが増えており、合計で約3,000万円の経済効果とみています。

### トレイルランニングによる地域振興

地元のもてなしと神流町の自然、コース整備の充実などから、神流マウンテンラン＆ウオークはRUNNETに掲載されているトレイルランニング大会で最も高い評価を受けています。

今後も他の組織や役場内、地元住民との良好な関係を維持して町全体を盛り上げ続けたいと考えています。

杉で覆われた手づくりのゴールゲート

全国的に高い評価を得た神流マウンテンラン＆ウオークは、プロトレイルランナーである鏑木毅氏が企画段階から携わっている。鏑木氏に、大会に関する思いやこだわりなどについて話を伺った。

## 神流マウンテンラン＆ウオークをプロデュース

**プロトレイルランナー　鏑木　毅氏**

### 開催のきっかけ

私は群馬県庁勤務を経て、現在はプロのトレイルランナーをしています。県庁勤務時代には地域振興担当の部署にいました。そこで神流町の地域振興の相談を受け、トレイルランニングの開催を検討しました。その途中にプロへ転向したのですが、トレイルランニングの練習で神流町へ度々訪れていた縁もあり、引き続きトレイルレースの企画に携わりました。

### コース設計の苦労

トレイルレースの開催にあたっては、地主や林野庁、県の環境保護の部署や民間の環境保護団体など様々な人々との調整が必要となります。特に民間の環境保護団体からは希少植物の群生地域に入らないよう要望もありました。環境への配慮などから、トレイルランニングの理想として当初思い描いたコース設計からは、多少の修正が必要となりました。

### 郷土色を大切にする

この大会を開催するうえで注意した点に、田舎のもてなしがあります。ウエルカムパーティーの料理は、郷土料理を提供するように提案しました。最初地元の人は「こんな料理で都会の人が喜ぶのだろうか」と不安がっていました。しかし素朴な料理が受け、結果的にこうした料理は好評でした。

### 限界集落のエイドステーション

エイドステーション（補給地点）は持倉という標高1,000メートル、人口12名の限界集落に設けました。ここでも、食べ物はこの地域で生産されたそばや花豆を提供してもらいました。

また民家の縁側を開放し、ランナーに休憩してもらいました。通常の大会ではエイドステーションからすぐにレースへ復帰しますが、この大会ではタイムの加算を気にせず縁側でくつろぐ選手をみることができました。

### 大会の評価

神流町での大会開催に際して、理想としていたのは数年前に参加したウルトラトレイル・デュ・モンブランという海外の大会です。この大会では、まち全体がトレイルランニング一色に染まります。このような大会を日本でもできればという思いで、レースを企画しました。

その結果、うまく行き過ぎるくらいの反響がありました。ランナーからは「日本一温かいトレイルレース」という評価を受け、多くの住民からもレースが支持されるようになりました。

こうした大会ができたのは、地元のキーマンの存在が大きいと思います。神流町では、岩崎産業振興課長がその役割を担っていました。開催にあたっては複雑な問題への対処などで多大なエネルギーが必要でしたが、地元の人々の力で実現できました。

### トレイルランニングの可能性

トレイルランニングで再発見することができた神流町の山道を、ランナー以外にも訪れてもらえる取り組みが進めば、より地域に活力が生まれると思います。この点は、東京の企画会社がハイキングツアーを実施するなど、着実に進展していると感じます。

また、最近自然の中で遊ぶ機会が減っている子どもたちに、ハイキングなど山に親しむ企画を検討しています。

このレースで、神流町のように何の変哲もなく、交通が不便で観光にも適さない地域がトレイルランニングで活性化していくことが証明されました。地元住民のやる気さえあれば、まちは元気になるのだと思います。

## 3. ロードバイク

かねてよりロードバイクの練習コースになっていた筑波山の道で、レースを開こうという取り組みが、09年よりはじまった。その開催の経緯や実現に向けた苦難等について、実行委員長の勝村氏に話を伺った。

### ロードバイクによる地域活性化

ツール・ド・つくば実行委員会（つくば市）

**実行委員長　勝村　健司氏**

#### きっかけはロードバイカーの提案

筑波山系の峠道は車の往来が少なく、また適度な傾斜が続くため、ロードバイカーには格好の練習コースとなっています。

２年ほど前、旅館の経営者があるロードバイカーから「ここでレースを開催してみたら面白いのにな」という話を聞きました。これを青年会議所に提案し、レースの実現に向けた検討を開始しました。

#### レース開催は苦労の連続

私は筑波サーキットで車のレースを主催しており、レースのノウハウは多少持ち合わせていました。しかし、自転車については全くの素人でした。また、他のメンバーもこの分野について知っている人はいなかったため、手探りのスタートとなりました。

まず、コース設計で問題が浮上しました。12キロ（標高差500メートル）のレースで進めようとして自転車屋さんに話を聞いたところ、この距離では短すぎて練習用のコースだと言われてしまいました。

また、レース中は道を占有するため、警察との折衝についても多大な労力を要しました。しかし、地域のために開催するという趣旨を徐々に理解してもらえたことで、開催に向けた指導をしてもらうことができました。

#### 「ツール・ド・つくば」の概要

第１回レースは2009年６月に開催しました。出場枠はロードバイク160台、マウンテンバイク40台、合計200台です。大きなレースでは２千台以上で開催しますので、小規模なレースです。安全面を配慮した結果、この台数となりました。

参加者を募集する前からインターネットで評判となり、出場枠は２日で埋まりました。参加者は30代から40代が中心で、８割は男性という結果となりました。

他の大会と異なるのは、頂上にゴールした後、自転車で下山しない点です。選手はバスで、自転車は毛布に包みトラックで山を下ります。レース後に事故が起きやすいことから、このような措置を採り、安全を確保しました。

#### 第2回大会では安全面を更に強化

第２回大会は、出場枠を500台に増やしました。それに伴い、安全面への対策も前回大会に比べて強化しました。国際大会のように応急救護資格を持ったスタッフをコース上のカーブ全てにはりつけ、合計200名のスタッフがレースを見守りました。

この大会には、アテネオリンピックに出場した竹谷賢二さんも選手として参加してくれました。本

人の希望もあり最後尾からスタートし、参加者に声をかけてレースを盛り上げ、最終的に２位でゴールしました。運営スタッフや参加者にとって、思い出深いレースとなりました。

### 地元の協力

他の大会は市町村が運営に関わっていますが、この大会は民間が主催となっています。そこで、つくば市にも協力をお願いしているところです。

事業者などについては、開催をきっかけに徐々に協力が得られるようになってきました。旅館組合はイベント当日に足湯を開放し、地元の住民もスタート地点やゴール地点で応援してくれます。

もともと、地元のために開催を決めた訳ですから、更に地域の人を巻き込んだ運営を目指しています。

### 地元の関心を高める

このレースのゴールは筑波山頂です。達成感に浸りながらみる景観は、すばらしいものがあると思います。反響は大きいため参加者を増やしたいとも思いますが、駐車場の確保や安全面の観点から、次回も500台程度の開催となる予定です。

今後は、地元の人々にもっと関心を持ってもらえるようなレースにしたいと考えています。参加者は市役所の庁舎に集合してから、スタート地点の山麓まで1.5キロほど市街地を走ります。そのとき、住民が沿道で旗を振ってくれるような、住民に支持されるレースを理想に思い描いています。

山道を駆け抜ける選手たち

ツール・ド・つくばのレース会場の近くには、廃線あとを活用したつくばりんりんロードという自転車道がある。その道沿いにロードバイカー向けの休憩場を設立して、地域のサイクルスポーツ振興を図ろうとする取り組みが始まった。

## サイクリストと地域住民の交流を創出

Pit Stop つくば北条＆りんりんプロジェクト（つくば市）

**代表　有野　真由美氏**

### サイクリストの立場で施設開設を検討

私は出版や編集の仕事をする傍ら、スキーや登山といったアウトドアスポーツに取り組んでいます。一昨年からはクロスバイク(注)に乗り始めました。

自転車の仲間たちとつくばのりんりんロードを走った際に、近くにコンビニがなく、トイレも使えず不便を感じることがありました。また、自動販売機で買える飲み物も種類が限られており、様々な機能を備えた休憩所がほしいと思いました。

（注）荒れ地向きのマウンテンバイクと舗装道路向きのロードバイクの特徴をあわせもつ自転車

### アンケート調査の実施

そこで実際に自転車に乗る人に意見を聞こうと思い、昨年のツール・ド・つくばで青年会議所と商工会の協力を得て、選手を対象としたアンケートを実施しました。アンケートは308枚回収できました。

その結果から、選手は土日を中心に頻繁につくばを訪れていること、「トイレがない」、「駐輪場がない」、「コンビニがない」などの点に不便を感じていることが分かりました。また、ロードバイカー向けの宿泊施設があれば利用するかという問いに対しては、４割の人が「利用する」と回答しています。

## Pit Stop つくば北条

こうした意見を踏まえ、休憩施設「Pit Stopつくば北条」の開設を決めました。ここでは、北条米のおにぎりなどの軽食を提供する他、インスタントラーメンや菓子、飲料やサプリメントなどを置いて様々なニーズに応える予定です。また、カットした西瓜など地元の農産物もすぐに食べられる状態にして提供します。

水や氷も提供します。夏の時期、イタリアの民宿では訪れるロードバイカーにホースで水をかけてもてなす光景がみられます。この場所でも同じようなことができればと思います。

その他にも工具や空気入れを用意することで不意の故障に対応するほか、雨や雷の避難所として利用してもらえればと思います。

施設は本年２月に着工し、４月までに完成の予定です。店内はテーブル席と座敷を設置し、奥に和室３室分のスペースを用意します。テーブル席と座敷は飲食スペースに、奥の和室は長時間休憩ができるスペースにしたいと考えています。

和室の前にはメンテナンス・スペースを設置して自転車のトラブルに対応できるようにします。

## りんりんプロジェクト

Pit Stop つくばの開設に合わせ、地域のサイクルスポーツ振興を目的とした「りんりんプロジェクト」を開始する予定です。

これは、サイクリストに対してはマナーの向上を呼びかけ、地域住民に対してはサイクルスポーツで人を呼ぶ仕組みづくりを考えてもらうもので、サイクリストと地域住民の関係性を深めることを目的としています。

例えば、近隣の事業者と提携してサイクリスト向けのクーポンを発行したり、ツール・ド・つくばに合わせてまちおこしのイベントを同時に開催することなどを検討しています。

こうした取り組みを通じて、地域に歓迎されるサイクリストを増やしていければと思っています。

## 行政との連携を模索

つくば市では「りんりんつくば〜自転車のまちつくば基本計画」のなかで、自転車が使いやすい体制・施設づくりとして「休憩、雨宿り施設の整備」という項目が掲げられています。私の行っている事業は、まさにこれと合致するので、行政との連携により、もっと可能性が広がるのではないかと期待しています。

## 茨城の魅力を伝える拠点に

私は岡山県の出身です。茨城県は食べ物が美味しく、海や山といった自然環境に恵まれたすばらしいところだと感じています。

このPit Stopからは、りんりんロード越しに季節によって異なる姿をみせる筑波山を眺めることができます。施設の運営を通じて自然豊かな茨城県の魅力を伝えるお手伝いができればと思っています。

そのためにも徐々にステップアップできればと思います。将来的には地域住民に飲食品を提供してもらい、サイクリスト同士のみならず、地域住民との交流の場に発展していければと思います。

りんりんロードからみたPitStopつくば北条

## 4．トライアスロン

県内では太平洋や霞ヶ浦などの水辺を活用して、複数のトライアスロン大会が開催されている。その動向や課題、今後について茨城県トライアスロン協会副会長の植田氏に話を伺った。

### 県内で3つの大会を運営

茨城県トライアスロン協会（潮来市）

**副会長　植田　義継氏**

#### トライアスロン

トライアスロンは水泳と自転車ロードレース、長距離走を連続して行う耐久競技です。アメリカが発祥で、日本では81年に鳥取県で初めて大会が開催されました。距離は開催地の地形などにより様々ですが、最近ではシドニーオリンピックで採用された水泳1.5キロ、自転車40キロ、ランニング10キロの規格で開催されることが多くなりました。

#### 茨城県トライアスロン協会

85年に開催された宮古島大会がテレビで放映されたことで、トライアスロンは全国的に知れ渡るようになりました。

その後、全国各地にトライアスロン協会が設立されました。茨城県では86年、全国で３番目の協会が潮来で設立されました。その年、潮来と波崎の２箇所で大会を開催しました。

#### 潮来トライアスロン全国大会

トライアスロン協会の設立に際し、潮来出身の国会議員に相談した経緯があり、まず潮来で大会を開催することにしました。しかし、潮来は道路が狭いため、大人数での開催には不向きでした。そのため、競技の参加人数を300人に絞っています。

また潮来大会は、３年前から市長が大会会長を務めるようになりました。観光都市として盛り上げていくためにも、もっとトライアスロンの価値をよく知っていただいて十分活用してもらえればと思います。

#### 波崎トライアスロン大会

潮来でのトライアスロン大会と同年に、波崎でも大会を開催しました。開催にあたり、警察から道路の使用許可を得ることに苦労しました。しかし、最終的には県知事にも協力していただき、開催することができました。

こちらは、第１回日本選手権大会や第１回アジア選手権大会を開催した日本を代表するすばらしいコースです。コースは海沿いの平坦な道で、大人数での開催にも対応できるため、この大会の募集人数は1,000名となっています。

波崎町は大会の開催にあたり、非常に協力的でした。多くの人から建設的な意見が寄せられ、地元の高校生や漁協、サーフィン団体など1,000名規模の人がボランティアに参加してくれました。また、当日は鰯のつみれや地元の野菜を用いた「ふるさと鍋」が参加者に振舞われるなど、地域色のある大会となりました。

#### ちびっこトライアスロン

小中学生を対象に開催する「ちびっ子トライアスロン」は昨年で５回目です。当初は常陸太田市（旧里美村）で開催していましたが、道路事情や安全面を考慮して３年前から笠松運動公園での開催に変更しました。定員は100名弱で、関東周辺の県から子どもたちが集まります。

この日は大会のほか、トライアスロン教室を兼ねています。イベントを通じて競技人口の裾野拡大を図ることができればと思います。

### 茨城県のトライアスロン大会

県内におけるトライアスロン大会は、ピークで11大会ありました。現在は環境や交通事情の変化などにより、潮来と波崎、ひたちなか市（笠松ちびっ子トライアスロン）の３大会に減少しています。

しかし、地域活性化につなげていく観点から、ひたちなか市でトライアスロン大会の開催を検討する動きが出ています。

### トライアスロンと地域活性化

トライアスロン大会では選手は朝早くスタートしますので、前泊が必要になります。選手のほかにその家族やコーチなどの指導者、大会スタッフが宿泊するので、その人数は参加選手の数倍になります。

また、当日は飲食代や土産代などが地元の売上に繋がるので、大会を行うごとに潮来で１千万円程度、波崎ではそれ以上の経済効果が発生しているはずです。地域はこうした経済効果にも着目すべきではないでしょうか。

### 課題は後継者育成

トライアスロン大会を開催するには様々な関係者との折衝があるため、多大なエネルギーが必要となります。また、スポンサーの確保といったマネジメント能力も必要になってきます。私は70歳になるので、後継者の育成が今後の課題だと考えています。

### 全国規模のトライアスロンサミットの茨城開催

本年、茨城県トライアスロン協会は25周年を迎えます。そこで、全国規模のトライアスロンサミットの神栖での開催を目論んでいます。こうした取り組みを通じて茨城県の知名度向上に繋げたいと思います。

## ５．マリンスポーツ

海に面した大洗町は、夏場を中心に多数のスポーツイベントが開催されている。おもてなし運動や、通年でスポーツを楽しむ環境を整備することによる、来街者増加への取り組みをみてみよう。

### 海で通年スポーツを楽しんでもらう環境を整備

**大洗町商工観光振興係　係長　深作　和利氏**

### イベント開催のきっかけは競技団体等の提案

大洗町では、重要な観光資源である海を活用したスポーツイベントが数多く開催されています。

開催のきっかけは、競技団体からの提案が大半です。都心からのアクセスの良さや広いビーチといった点が、イベントの開催に好条件のようです。

例えば、ビーチバレーのコートは15面あり、また駐車場も充実していますので、大規模なイベントに対応が可能です。

### スポーツイベントを「大洗のまつり」に位置付ける

「大洗のまつり」は７月から11月まで町内で開催される様々なイベントを総称したものです。

スポーツイベントでは、「ビーチバレー in 大洗」（７～８月）、「全日本ビーチレスリング選手権大会」（８月）、「ISU茨城サーフィンクラシック」（９月）などが開催されています。

ビーチバレーは、21回目となる昨年から、新たな取り組みとして４人制ミックス（男女混成）の全国大会を実施しました。北海道から鳥取県まで11都道府県16チームが集まりました。

砂浜の上で競われるビーチレスリングの大会は、アジアカデットレスリング選手権大会（15～17歳を対象とした大会）の開催をきっかけに、大洗

で始まったイベントで、昨年で５回目となりました。毎回有名な選手をゲストとして招いており、昨年は伊調選手や吉田選手、浜口選手といった北京オリンピックの代表選手が大洗を訪れています。

### 地域への波及効果

イベントの開催時には参加者だけでなく運営スタッフも町内に宿泊するため、多くの人が飲食などの面で地元にお金を落としてくれます。また、ISU茨城サーフィンクラシックでは参加者に大洗町へ泊まるように働きかけてくれるなど、地元経済への配慮もあります。こうした動きにより、イベントによる経済効果は相当あるとみられます。

### 参加者の確保が課題

課題は、参加者の確保です。スポーツイベントにおける参加人数はやや減少傾向にあります。

対策として効果的なイベントのPRを実施するため、運営側には早めに情報提供をお願いできればと思います。例えば、ビーチレスリングやサーフィン大会にはトップ選手が集まるため、多くの参加者や見学者が集まります。住民の関心も高いので、早めにゲストや選手の名前がわかれば、より多くの人にイベント内容を知ってもらえます。そうすればイベントの参加人数も増加するはずです。

### 「町民おもてなし運動」でリピーターを呼び込む

今後はイベントの数よりも、リピーターを増やすことで多くの人をまちに呼び込んでいきたいと考えています。そのためには、事業者や行政、町民が一体となり訪れる人に心のこもった対応をする「町民おもてなし運動」を通じて、また来たいと思ってもらえる町にしていければと思います。

### 年間を通じてスポーツを楽しむ環境を整備

大洗町のスポーツイベントは夏場に集中していますが、大洗は年間を通じてスポーツを楽しめるという点をPRしていきたいと考えています。例えば、ビーチバレーのコートは年間を通じて一般開放しています。予約をせず、無料で楽しめます。また、２月には大洗マラソン サンビーチ・マイルレースが行われており、こうしたスポーツを目的に大洗を訪れ、町の魅力を感じていただければと思います。

ビーチバレーin大洗

## 6．リバースポーツ

久慈川下流では、毎年6月にカヌー大会が開催されている。その大会を主催するスポーツショップの鈴木氏の取り組みについてみてみよう。

### 久慈川でカヌー大会を定期開催

スポーツエス（日立市）

**代表　鈴木　久米男氏**

### 自らの興味でカヌーの販売を開始

当店は昭和44年創業のアウトドアショップです。当初は登山やスキー、スキューバダイビングに関する用品を販売していました。

昭和60年ごろ、作家の野田知佑さんが雑誌「BE-PAL」でカヌーを紹介したことがきっかけで、カヌーをやりたい人が増えてきました。私自身も友人であるモンベルの辰野勇氏（現会長）の影響でカ

ヌーに興味を持つようになり、当店でカヌーの販売を開始しました。

### お客さんの要望からイベントを開催

カヌーの販売を開始してある程度の期間が経過すると、お客さんから「カヌーの運動会をやりたい」という要望が出てきました。そこで流れが穏やかな久慈川下流での開催を検討しました。

まず河川国道事務所に相談したところ、「リバースポーツをする人達は自然を大切にする。大変すばらしい話なので是非開催してください。」と歓迎されました。

### イベントの概要

第１回大会は、93年に開催し、25人（21艇）が集まりました。種目は、カナディアンカヌー（２人乗り）、リバーカヤック（１人乗り）、シーカヤック（１人乗り）に分け、さらに性別や年齢を区分しています。リバーカヤックの参加者が最も多い傾向にあります。

レースは、約1.5キロのコースで競われます。まず上流に向かって進み、ブイを時計回りで旋回し、戻ってきたら船を降りて50メートルほど走り、大会本部に戻ってくるまでのタイムを競います。

参加者は、ピーク時で75名ほどに上りました。現在はカヌー人口の減少もあり、50名程度となっています。しかし他の大会に比べ、この大会は支持されているほうだと感じています。

レースは15回目であり、少しずつ改善を重ねています。現在は多めに昼食や商品を用意し、レース参加者以外にもジャンケン大会で景品を渡すようにするなど、大会を盛り上げ、参加者を増やす努力をしています。

### カヌー教室の開催

スポーツエスでは、初心者向けのカヌー教室を開催しています。この教室を受講すれば、初めてカヌーにふれる人でも１日で漕げるようになります。そのほかにカヌーツーリングで瀬遊びや、途中の河原で弁当を食べて１日をのんびり過ごしてもらうので、自然の魅力を感じてもらう良い機会になると思います。

### 川遊びのイベント

作家の野田知佑さんは久慈川でのカヌーが気に入っているようで、雑誌などで紹介しているほか、「川遊び教室＆ハーモニカライブ」という小学生を対象とした１泊２日のイベントを開催しています。昨年は全国からスタッフ及び参加者が集まり、総勢420名のイベントとなりました。

こうしたイベントを通じて、子どもたちに自然の大切さを体験してもらっているようです。

### 課題はカヌー人口の減少

県内のカヌークラブは、若い人が入らず高齢化しています。また、高校については、カヌーを指導できる先生が少ないため、県内にカヌー部は少ない状況です。こうした点もカヌー人口の減少、高齢化に繋がっているようです。

### イベントでカヌーの魅力を広める

カヌー人口は他の競技に比べて少ないものの、やり始めると続ける人が多いという傾向があります。ほかにカヌー大会が少ないので、当店が今後も年１回、６月の開催を続けていくことで、カヌーの楽しさをより多くの人に伝えていければと考えています。

リバーカヤックで久慈川を上る選手たち

群馬県みなかみ町では、複数の業者が部会制でラフティングというゴムボートで川下りをするスポーツの体験イベントを提供している。アウトドアスポーツを資源と捉え、町が条例により保護を図ろうとする動きや宿泊業者が連携を図る動きなどについて話を伺った。

## ラフティングにより人を呼び込む

みなかみ町アウトドア連合会（群馬県みなかみ町）
**副会長　小橋　研二氏（有限会社カッパクラブ代表取締役）**

### ラフティング

ラフティングというスポーツは、アメリカの軍隊による河川調査がモデルのスポーツで、90年代前半に日本に入ってきて商業化されました。

みなかみ町では、日本で最も早い時期にラフティングが始まりました。もともとこの町では、30年以上前からリバーベンチャー選手権という探検部の学生によるゴムボートの急流下りの大会が実施されており、川下りが盛んに行われていました。

みなかみ町を流れる利根川上流は、雪解けの時期には急流となり、ワールドクラスの難易度を誇るコースができあがります。そのため、外国人もこのコースでラフティングを楽しんでいます。

私は岡山県の出身ですが、学生時代から川下りを楽しんでいた経験を活かし、この町でラフティングの事業をはじめました。

### ラフティング部会の設立

97年、ラフティングの普及と安全性の向上を目的として町内にラフティング組合が設立されました。設立した当初、当時の水上町の観光協会に加入を申し込みましたが、却下されました。その後、みなかみ町への合併を機に、加入することができました。

その当時、町内にはアウトドア協会と観光協会内のアウトドア部会の２つの組織が存在しており、整合性がとれていない状態でした。そこで昨年からアウトドア連合会に統一し、ラフティング組合も連合会ラフティング部会と名前を変えました。

部会には、私が代表を勤める㈲カッパクラブのほか、10社が所属しています。部会制とすることで、一定の質と安全性が備わった事業者のみがラフティングを取り扱う体制を整備しています。一部の地域では、こうした制度がないため、業者が乱立して安全面などの低下が課題となっています。

### 町におけるアウトドアスポーツの位置付けの変化

みなかみ町には、かつて多くの温泉宿がありました。昭和の時代にはスキーブームで、平成に入ると新幹線や高速道路開通の影響で多くの人がまちを訪れていました。しかし、スキーの人気が低下すると、旅館は年々減少していきました。

こうしたなか、旅館は我々のようなアウトドアイベント業者と連携して観光客の取り込みを図りはじめるなど、以前に比べてまちにおけるラフティングの扱いが変わってきているように感じます。

現在の町長はアウトドアスポーツへの関心が高く、先日はニュージーランドへの視察旅行を実施しました。この視察には、旅館の若い経営者や飲食店経営者などが参加しました。自然保護省の職員やクイーンズタウンの首長と面談し、国レベルでアウトドアに関する法整備やアウトドアガイドの規制などが進んでいる実態を確認してきました。

### 規定により安全性を高める

行政には、外国のようなガイドの資格認定や規定の整理を求めています。事業者団体が独自に決めたルールではなく、第三者が認定することで安全性が高まるからです。

こうした要望に対し、町でも安全基準や事業者の基準などに関する条例の制定に着手し始めました。条例化で安全面により配慮した体制を確立することで、多くの観光客にみなかみのアウトドアスポーツを楽しんでもらえればと期待しています。

### 河川の課題

春から秋にかけて体験できるラフティングの舞台は、季節によって大きく変化します。夏場になるとダムの放流が抑制されるため、流れが穏やかとなり家族向けには良いのですが、コースは大幅に短縮されてしまいます。そのため、新たなコースの開発や他地域での開催を検討するなどの対応が必要だと感じています。

### 昔の遊びをプログラムのヒントに

今後はラフティングなどの体験ツアーに加え、自然体験の分野についても取り組んでいく方針です。この地域に住む年配の人に、子どものころに遊んだ川辺をガイドしてもらったり、川辺での遊び方を教えてもらい、プログラム開発のヒントにしていくことで、幅広い人にアウトドアイベントを体験してもらえればと考えています。

激流をボートで下るイベント参加者

# 第4章　アウトドアスポーツイベントによる地域活性化に向けて

本章では、これまでのアンケート調査や、行政・企業へのヒアリングをもとに、スポーツイベントの地域への効果や、地域活性化に向けたスポーツイベント実施のポイントを整理する。

## 1．アウトドアスポーツイベントの地域への効果

表３は、アウトドアスポーツが地域にどのような効果を及ぼしているかについて４つの項目で示している。

まず、イベント実施による賑わいについて、当日及びその前後の短期間に効果があったかどうかを「短期」に、それよりも長期間、つまり通年や季節を通じて効果がみられたかどうかを「長期」に示した。また、イベントを通じて地域内での消費や宿泊などの経済効果が生じたかどうかを「経済的」、住民のボランティア参加による連帯意識向上や選手との交流がみられたものなど、地域内外の人同士の関わりが生じたかどうかを「社会的」の項目に示した。

マラソンや自転車ロードレース、トライアスロンなどでは、選手やボランティアの滞在の他、沿道での応援･観戦者など、大会当日は多くの人で賑わう。

**表3：アウトドアスポーツイベント等の地域への効果**

凡例　◎：強い効果がみられた　○：効果がみられた　△：限定的ながら効果が見られた　ー：効果はみられなかった

| | マラソン | | トレイルランニング | | 自転車ロードレース | トライアスロン | リバースポーツ | マリンスポーツ | その他の取り組み | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ヒアリング先 | 土浦市 | アールビーズ | 大子町 | 神流町 | ツール・ド・つくば実行委員会 | 茨城県トライアスロン協会 | スポーツエス | 大洗町 | ナムチェバザール | 有野氏 | みなかみ町アウトドア連合会 |
| 大会名or取り組み | かすみがうらマラソン | オクトーバー・スポーツマラソン他 | 奥久慈トレイル50K | 神流マウンテンラン＆ウオーク | ツール・ド・つくば | 潮来トライアスロン全国大会 波崎トライアスロン大会 | スポーツエスカヌー大会 | ビーチバレーin大洗他 | トレッキングツアー | Pit Stop つくば北条 | ラフティング体験 |
| 属性 | 行政 | 企業 | 行政 | 行政 | 団体 | 団体 | 企業 | 行政 | 企業 | 個人 | 団体 |
| 短期 | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ― | ― | ― |
| 長期 | ― | ― | △ | ○ | ― | ― | ― | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 経済的 | △ | ○ | ― | ○ | △ | ○ | △ | ○ | △ | △ | ○ |
| 社会的 | △ | ― | △ | ○ | △ | △ | ― | ― | ― | ○ | ― |

一方、トレイルランニングは、練習などの目的でコースへの訪問がみられることから、効果は長期にも及びつつある。

「経済的」効果については、種目を問わず選手や大会関係者の宿泊などの消費行動に結びついているものの、十分な効果を上げているケースは少ない。大子町では費用対効果が薄いという指摘もあった。また、「社会的」効果では、神流町の取り組みを除くと、成果に乏しい状況にある。

以上のようにアウトドアスポーツイベントの大半は、短期的な効果に留まり、経済的、社会的効果も極めて限定的なものとなっている。では、地域活性化に向けてどのような取り組みが必要なのだろうか。事例をもとに整理した。

## 2．地域活性化に向けたポイント

### (1) イベント成功のための条件

**①経済効果を見据えたイベント開催**

県内市町村向けのアンケート結果では、「地域経済への波及」を目的とした大会は52大会中24大会に留まっている。アウトドアスポーツイベントは、住民の健康意識啓発といった社会的効果を目的とするだけでなく、経済効果を生み、地域を活性化させることを最終的な目標とすべきである。

**②他の分野のイベントとの融合**

アウトドアスポーツイベントは様々な地域から人を呼び込む効果をもつ。そこで、イベントを単発で終わらせるのではなく、例えば地域の食や文化をPRする取り組みなどとうまく融合させることが求められる。

**③住民や行政全体など地域ぐるみで取り組む**

アウトドアスポーツイベントは広範囲で実施することもあり、多くのボランティアが競技者をサポートする必要がある。そのため、住民の理解や協力が、イベントの成否に大きく影響する。

神流町ではイベントの開催に当たり、地域のため開催するという姿勢を明確にすることで、多くの住民のボランティアとしての運営参加につなげ、意見を出し合って手づくりの大会を築き上げた。また、かすみがうらマラソンは、商工関連の部署との連携でランナーズヴィレッジが実現した。

住民の自発的なエイドステーションなどのような好意が、競技者と住民との交流を深めるだけでなく、住民が地域の魅力を再発見するなどの面で活性化にもつながる。

**④大会の魅力を高める、郷土の特色を大切にする**

かすみがうらマラソン事務局は、前例を踏襲していくだけでは参加者が減少するという危機感を持ち、毎年新たな企画を出し続けている。それが奏効し、参加者から高い評価を得て参加人数が増加している。また、神流マウンテンラン＆ウオークでは、郷土色を前面に出した手づくりを大切にすることで、多くの都会からの参加者の心をとらえた。この取り組みから、その土地の良さを活かした独自の工夫を凝らしていくことがイベントで多くの人を呼び寄せるポイントと言えそうだ。

**⑤地域外の人の考えを活かす**

鏑木氏は神流町の出身ではないが、その自然に惹かれてイベントの開催を提案している。このような事例は、地元に住む人が当たり前のものと思っている自然資源を、特別なよきものと認識して活用していこうという外部の目･力の重要性を物語っている。

この外部の目・力を活かすため、地元の人たちは外から来た人と協力していくことで、地域の自然資源の活用の可能性を広げていくと良いのではないだろうか。

**⑥事業者を効果的に活用する**

アールビーズスポーツ財団は、行政がネックと感じている運営上の負担や協力者の確保を、独自のシステムでサポートするなど、多くのスポーツイベントに関与している。

ナムチェバザールはアウトドアスポーツイベントの潜在力を行政に説くことで、奥久慈トレイル開催のきっかけを創出した。

事業者は行政には無いアイディアやノウハウで、イベントを発案したり運営したりする力を持っ

ている。地域活性化を目指す行政や地域住民は、こうした事業者を活用し、イベントの開催につなげることも一つの方法である。

**(2) イベント効果の定着にむけた工夫**

**①イベントの効果を長期間維持させる**

神流町ではトレイルコースをレース時以外も開放し、練習会などで継続的に人を呼び込んでいる。

また大洗町では、「大洗のまつり」というイベントのなかで、ビーチバレーやビーチレスリングなど様々な海辺でのアウトドアスポーツイベントを開催している。イベント単体の効果は限定的ながら、連続して開催していくことで長期的な経済効果につなげている。その他にも、ビーチバレーのコートを無料で開放することで、夏季以外でも人を呼び込んでいる。アウトドアスポーツのイベントは開催時に限ることなく、競技を楽しむ人々を通年で呼び込むような工夫が必要となるだろう。

**②他の取り組みと補完関係を結ぶ**

ツール・ド・つくばはロードレーサーにとって、評判のコースとなり、大会当日の飲食や前日の宿泊など、短期的な経済効果がみられた。

一方、Pit Stopつくば北条は通年でサイクリストを支援する施設であり、一気に人を集める効果は薄い。しかし、長期にわたる効果が見込まれる。

短期的な効果を持つツール・ド・つくばと、長期的な効果を持つPit Stopつくば北条が相互に補完し合えば、より効果的に地域活性化に寄与することが可能となるだろう。

## 3. 単発のスポーツイベントをこえるために

最後に、アウトドアスポーツイベントによる効果を一層高める方策について考えてみた。

**イベントを盛り上げるために～広域連携の必要性**

茨城県では各地で様々な種目のアウトドアスポーツイベントが開催されている。こうした状況を踏まえ、イベントを開催する市町村同士で連携し、県全体でアウトドアスポーツを盛り上げていく取り組みを進めてみてはいかがだろうか。

例えば、県内で開催されるイベントをスタンプラリー制として、マラソンなどの大会で一定の距離を走破した人に対して記念品を提供する。また、イベントの参加者に郷土の特性をもつような特典を提供する取り組みなどが考えられる。

**スポーツツーリズムへの進展**

論説で原田教授が指摘するように、幅広い地域から人を呼び込むためには、スポーツツーリズムのようなテーマ性をもった着地型の商品開発が必要である。

この点では、利根川の急流とラフティングを結び付け、行政が事業者への関与を深めるみなかみ町の取り組みが参考になる。その土地に存在する地理的資源とアウトドアスポーツを結びつけることで、競技者をその土地に引きつけることが可能となる。

また、Pit Stopつくば北条の取り組みもサイクリング目的の旅行者の取り込みにつながる。こうした取り組みは、旅行者の満足度を高め、リピーター化につながるものと考えられる。

スポーツイベントの効果は短期間に留まりがちな中で、その効果を長期・リピート化する工夫や、地域の経済に金銭が流れる仕組みをつくりこむ戦略が重要である。その戦略の立案と実現の過程で、行政と住民、事業者の連帯が生まれる。さらにイベントの成功とともにイベントのなかでの選手と住民の交流が外から地域への来訪へと発展し、住民に地域の魅力を再発見してもらう機会につながる。

全国的にアウトドアスポーツイベントが増加しており、今後は参加者によるイベントの選別が予想される。茨城県は都心に近く、海洋や湖沼、山間部を活かしたスポーツイベントを行える優位性がある。このような地理的条件を活かして魅力の高いアウトドアスポーツイベントを開催することで、地域振興へつなげることが可能となるだろう。

（貝塚・萩原）